

# 序

従来の薬科大学での臨床教育に最も欠けていたのは学生の症例解析能力の鍛錬不足であった。4年制薬剤師教育のカリキュラムの下での薬物治療学の教育は、主として授業時間数の足りなさから疾患の病態生理と薬物治療との繋がりが理解できるレベルに学生を導くのが現実的な教育目標であり、その知識を自在に使いこなして症例解析を行うレベルの教育は学部卒業後の臨床薬学大学院での教育に委ねられていたのであった。

しかし、6年制薬剤師教育では5年次に長期の臨床実習が学生全員の必修科目として設定されており、周到的な事前教育も実施される。この機を活かして実践力のある薬物治療教育を行わなくてはならない。そのためには、患者の病態を診療録の問診記録や臨床検査値から読み取り、知識として修得した薬物の薬理学や体内動態学を目の前の患者の薬物治療に活かす訓練が必要である。これは薬剤師教育に関わる者達に等しい思いであった。そのような折り、羊土社から新しい薬剤師教育に活かせる副読本制作のお誘いを受けた。そこで、同じ思いを持つ医師または薬剤師の経歴を持つ薬科大学教員を中心に執筆陣を組織し、従来にない視点で「症例で身につける 臨床薬学ハンドブック」を編纂したのである。

この本は既に多数上市されている薬物治療学の系統的な教科書ではない。薬学生の臨床教育の観点から創作した多くの症例の中に薬物治療のtipsをちりばめたハンドブックである。一通り系統的に薬物治療を学んだ薬学生は、本書で薬物治療学の実践的演習を行うことをお勧めする。少人数グループでの演習教材として使用するのもよいだろう。この本をマスターすれば長期の病院・薬局実習に自信を持って臨むことができる薬物治療の能力を養うことができるはずである。

6年制薬剤師教育を受ける学生は、医師不足、医療の公開制への社会の関心、薬物治療の納得と同意への患者意識の高まりなど、薬剤師が医師と看護師と共に医療に貢献することを社会が期待しているという千載一遇の追い風の時代に臨床実習を行うことになる。薬物治療における医師の力強いパートナーであり、公平な立場での患者の擁護者であり、薬物治療の信頼できるリスク管理者として育って行く学生達の薬物治療教育に、本書がいささかでも役立つなら執筆者一同これに勝る喜びはない。

2009年 3月

執筆者を代表して  
明治薬科大学薬物治療学  
越前 宏俊